

## 研究論文 (Articles)

# フィールドワークの技法と作法<sup>1)</sup>

～子どもを対象としたフィールドにおける問題点を手がかりに～

水 月 昭 道

(立命館大学衣笠総合研究機構)

## Distinction of Technique and Decency when Studying Children in the Field

MIZUKI Shodo

(The Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University)

This study examines techniques in fieldwork-research based on issues arising in communication between field researchers and research objectives in a case study observing school children on a road. Techniques are examined for resolving or avoiding problems. The main issues are as follows: ① how fieldworkers take part in a children's group and their play-culture in spite of their adult sense of values; ② children's pleasures and dislikes with the fieldwork because of showing favoritism to some children in their behavior and communication and; ③ how fieldwork-researchers retreat from the fieldwork and children's groups without having a negative emotional impact on the children. The findings of this study indicate that fieldwork-methodology should be based on new concepts and new techniques of social behavior and communication.

**Key words** : children, play, fieldwork-methodology, decency

キーワード : 子ども, 遊び, フィールドワーク, 作法, 方法論

### 1 研究の背景および目的

現在, フィールドワークについての文献は数多く刊行されている(佐藤, 2002, 箕浦, 1999他)。そのなかには, タイトルに, 「方法」や「技法」, 「実践」などといった言葉が使われている

ものも少なくない。そこでは, どのようなフィールドワークを行い, どのようにフィールドノーツをまとめ, どのように分析し表現するかということについて詳しい解説がなされている。

こうしたフィールドワークの方法論を取り扱った文献の多くは, フィールド研究を行う調査者がいかにしてフィールドへ入っていき, そこでの活動にかかわるなかでいかにしてデータを記述し考察を行っていくのかという, フィールドへ赴く研究者にとって必要となる技術的・方法的な戦略項目について, 頁の多くが割かれている。これらの文献は, 研究を行う立場の者に

1) 本研究は, 日本学術振興会・人文社会科学振興プロジェクト「ボトムアップ人間関係論の構築」及び, 文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築—対人援助のための人間環境研究(平成17～21年度, 代表 望月昭)」研究法プロジェクトによる援助を受けて行われた。

向けて書かれているといえる。

一方で、フィールド研究の現場においては、相手となる調査対象者がいることで成立しているという構図があることも見逃せない。技法について書かれた多くの文献は、研究を行う側の立場にたって書かれているのであるが、研究の対象とされる側の視点について取り上げてあるものは極めて少数である。それは、文献の性格上しかたがないことと捉えることもできよう。

しかし、研究者がインフォーマントに接するとき、彼らがどのような気分となっているのかといったことや、彼らに接触する際の礼儀や研究期間中を通して研究者がインフォーマントへ接する際の態度のあり方、研究が終了しフィールドを引き上げるときの態度などといったことについては、相手があるという関係性のなかで展開されるフィールドワークの性格上からも、十分に目を向けていくことが求められていく必要があるのではなからうか。

こうした視点については、これまでフィールドワークにおける研究者倫理などといった観点からの議論が行われてはいるが（柴山，2006）、あれをすべきでない・こうした行動は控えるべきだといった、研究者の行動規定を示したものであることが多く、フィールドワーク実施の際に、インフォーマントと同列的な関係性のなかに身を置く機会も多いフィールドワーカーの立場のなかでの立ち居振る舞いのあり方といった、本稿が取り上げようとする観点とは相容れない。

フィールドワークは相手との関係性がきちんと構築されるという、良いラポールの形成が実現しているなかでこそ、いわゆる良い研究が進められるはずであり（佐藤，2002）、倫理規定に示されるような、研究協力者を大事に扱うことなどといったことは、良いラポール形成をどのように構築し維持し終了を迎えるのかといった議論のなかではそれほど深く噛み合うもので

はないだろう。研究者が自らの行動を規定することと、インフォーマントとの関係性をどのように築くのかといったことは分けて議論したほうがよいだろう。本稿では、その点を作法という視点を通して取り上げてみたい。

良いラポールの形成の議論は、『フィールドワークの技法』に詳しいが、個々のフィールドの実態として文化的・社会的な差が大きく存在することもあって、一概にこれといったやり方はなく、その場その場におけるフィールドワーカーの態度に一任されているという実情が指摘されている。この文献には他にも、事前準備としての調査依頼書の作成やゲートキーパーへの“つて”の取りつけの薦めや礼儀などといったことに言及してはいるが、これらについても、その時々においてさまざまな異なる状況のなかで実施されることであるため、一元的な方法を提示するということの難しさが説かれている。

先行研究におけるフィールドワークの実践についての議論は、さまざまなフィールドにおける事例研究を積み重ねていき、多様なフィールドでの出来事がフィールドワーカーの間に情報として蓄積されていくこと自体が重要であるということを示唆しているようである。

こうした背景から、本稿では、子どもを対象としたフィールドを特に取り上げ、フィールドワーカーとして私が体験したことを通じて、このフィールド独自に見られる問題点や疑問といったことについて取り上げてみたい。これまであまり議論されてこなかった、子どもとフィールドワーカーとの直接的・間接的にかかわりのなかでの両者の関係性の構図に注目することで、フィールドワークの方法ではなく、フィールドワークにおける作法という視点を通じて、現場で構築されている関係性のあり方についての議論を深めていくことが本稿の目的である。

## 2 フィールドの概要

### 2-1 本稿で取り上げるフィールドについて

本稿では、筆者が子どもの遊びを喚起する生活環境についての調査を実施した研究フィールドを例として取り上げ、そこで展開されたフィールドワーカーとインフォーマントとのやりとりの過程や関係構築を見つめ直しながら、フィールドワークにおける作法ということについて考えを深めていきたい。取り上げるフィールドと実施された研究の概要は以下のようになっている。

このフィールドにおいて実施された研究は、通学路における子どもの道草遊びの行為と道環境とのかかわりについてのフィールドワークであった。研究では、子どもの遊び行為と道環境との関わり方の構造が明らかにされた。具体的には、道環境に備わる遊びのアフォーダンスと子どもの遊び行為との関係性から、遊びの道具に転用されやすいオブジェクトの形態的特徴などが明らかにされている。また、子どもが通学路を歩きながら移動することで、環境のなかに遊びのアフォーダンスを見いだしている様子も明らかにされた。ここでは、調査データの分析から、道環境と子どもとの相互交流の形態としては、「環境変化型」、「行動変化型」、「ルーチン型」の3つのタイプが見いだされたことを報告しておく（水月、2004）。

子どもと道環境との関係性の構図は、両者の間に切り結びが発生することにより成立しており、本調査では特に、下校路を移動していくという過程における子どもの行動の文脈のなかでこうした構図が成立している様子が見いだされた。このことから、子どもと道環境との切り結びの場面に見られる、子どもの行為と対応する道環境のアフォーダンスは、子どもと道との動的な関わりの中に内在すると解釈された（水

月・南、2003）。以上が、ここで取り上げるフィールドにおいて実施された研究の概要である。フィールドは春日市にある小学校区の指定通学路であり、インフォーマントは通学路を利用する小学校4、5年生の2つのグループであった。

以上のように、本フィールドにおいては、調査者が子ども集団のなかへ入っていく参与観察を試みている。こうした、「子ども」を対象としたフィールドワークを行うなかで、調査者自身がさまざまな疑問や問題点といったことを感じるに至った。本稿では、調査者の経験から導かれた疑問や問題といった材料を持ち寄ることで子どもを対象としたフィールドワークの方法的概念の領域における視点を深める機会としていきたい。

子ども集団を対象とした参与観察の場合、フィールドワークの技法としては、彼らとの適切な距離の取り方や観察の場面設定、記述の方法などといったことが重視されるが、こうした技術的な面以外にも、フィールドへ入っていく過程での周囲に対する態度や、子どもへの関わり方、そして、フィールドから引き上げる際の態度などといったことに対しては、調査者が常に責任ある態度を求められることはいうまでもないだろう。フィールドワークの実践の場においてこれらの態度は、フィールドワークの技法というよりも、作法として捉えなおすことの必要性を今回のフィールドワークから感じている。本稿では一貫してこのことを問うていきたい。以降では、子どもや地域社会との関係性をどのように構築し、そして、どのように撤収するべきかを、事例を交えて議論の題材として提示する。

### 2-2 フィールドの選定と関係者への挨拶

#### —ゲートキーパーとのラポールの形成

フィールドの選定にあたり、このフィールド

で展開された研究は、子どもと道環境との関係性の切り結びに影響する環境や要因がより明確に浮かびやすくすることができる調査地が求められていた。この場合、環境的に異なる2本の通学路において、観察対象として同じグループの子どもたちの道草遊びのあり方や子どもの意見を比較するといったことが、それらの目的に合う1つの方法として考えられた。そのような比較可能な通学路を探したところ、歩道設置工事に伴う通学路の変更によって3ヶ月の間、臨時通学路を使用することとなった小学校区があることが判明し、調査対象地として浮かび上がった。予備調査から、臨時通学路と現行通学路の形態の違いが認められ、また、それらの道を同じ子どもたちが通学コースとして利用するということもあり、子どもと道環境との関係性の切り結びに異なる環境下でどのような違いが見られるかといったことの観察を行うには最適であると判断されたためこの小学校区が調査対象地として最終的に選定された。

その選定過程については、以下のような経緯があった。フィールド研究を遂行するために、最初に行ったことは、小学校と地域への協力依頼であった。小学校へは、当校に通う児童の父兄の一人が、調査者の所属する大学の教員であるという縁に恵まれたこともあり、そのご父兄を介して小学校の先生と直接お会いできる機会をいただいた。電話による簡単な事情説明を行った後、協力依頼書および調査目的書等を作成して小学校へ出向き、現地で担当の小学校教諭および学校長に直接、本フィールドワークについての説明を行った。調査の趣旨と内容の説明を丁寧に行うことで、小学校から調査許可および調査を行っていることを周囲に示すための腕章を頂くに至った。

次に、小学校からの許可証と腕章をもって、地域の町内会長のお宅へ挨拶に伺った。その際、通学路に歩道設置工事がなされることで通学路

が一時変更になるが、2つの通学路における子どもたちによる使いこなしの違いや、その印象などについて調査を行いたい旨をお伝えすることで、調査の了承を頂いた。さらに、児童のご両親に対しては、学校と町内会長の両者から説明を行っていただけることとなった。

このフィールド調査を開始するにあたっては、まず、以上のように学校と地域の両方から許可を得ることから始めている。つまり、子どもを対象としたフィールドにおけるフィールドワークでは、子どもたちが所属する学校の先生や地域の世話人が、最初の公的なゲートキーパーおよびスポンサーとなるのである。

子ども集団へのフィールドワークの実施には、公的なゲートキーパーからの許可が得られないことには先にすすめないことが特徴的である。このフィールドにおいては、たまたま“つて”があったために、さほどの苦労もなくゲートキーパーからの許可を取り付けることが可能であった。ただし、調査の許可をとるにあたっては、相手に対して事前の電話によるアポ取りから始まり、調査の意図についての説明書の作成、誓約書の作成などといったものを準備して直接の説明に伺うというような、きちんとした礼儀をもって約束をとりつけ丁寧な説明を特に意識して行った。万一、ここでの不作法があれば、その時点で意図するフィールドワークは致命的な失敗へと結びつくためである。

### 3 子どもを対象としたフィールドにおける作法について

#### 3-1 子どもへの接触

##### —ファースト・コンタクトの経緯

公的なゲートキーパーからの許可を取り付けることが出来たならば、その次のステップである、子ども集団への直接のフィールドワークを

実施していくこととなる。この段階で、今度は、子ども集団のなかにはいるはずのゲートキーパーとの関係性の構築を目指す必要が生じてくる。

本フィールドにおいて、子どもとの最初の接触は次のような経緯で行われた。まず、通学路の変更に伴い、当初は集団登下校の形態になったため、私は児童の父兄とともにこの登下校に付き添う形で参加することにした。幾度かの登下校が繰り返されるなかで、道の環境調査や子どもの行為の観察のためにカメラやVTRを使用していると、何人かの子どもたちが声をかけてくるということがあった。子どもたちは、私のカメラVTRなどの機材に興味を持ったらしく、貸してほしいやら撮影して欲しいやらといったことをねだってくるが多々あった。私は、積極的に声をかけてきた子どもがゲートキーパーであると考え、携行している撮影機材をゲートキーパー的な存在の子どもとの関係を構築する媒介物として意識して使い、次第に子どもたちとの仲を深めていった。十分に親しくなったのち、こちらの調査内容や調査意図を説明すると、ゲートキーパー的な役割の子どもが中心となって、「おっちゃんも調査するらしいけん協力してやろうぜ」といって、周囲の子どもたちに声をかけてくれ、こうした経緯から、子どもたちが調査に協力してくれるということになり、私は彼らの登下校に仲間として参加することになった。

調査に協力してくれることになった子どもたちは、4年生と5年生の子どもたちで、それぞれ仲良しグループを形成していた。グループのメンバーは、4年生については3～7名の間で女子2名を含む推移があり、5年生については4名の男子メンバーで固定されていた。こうした固定されたメンバーとの登下校は、観察対象グループの下校実態に深く迫れるという方法上の優位点があるという点で好ましいものであった。

一方で、いつも同じ対象者であるために下校時の環境と子どもとの関わり方についてのデータ収集に一定の限界があることも危惧されたのではあるが、この研究においては、子どもと環境との関わり方に影響する要因や条件などへの考察を深めることを意図していたことから、固定メンバーによる登下校の実態に注目することが方法的に妥当であると判断されたため、グループの登下校に参加する方法を選択している。

2つのグループ間においては、学年の違いから、下校時間も異なり、同じ日の下校ルートにおける道草遊びの場面を異なる2つのグループを対象として観察できるということから、検討事例に幅を持たせることが可能であり、この点でも2つのグループを観察対象とする意義があると思われた。

私がフィールドワーカーとして子どもたちに接触するときにも最も注意したことは、彼らと信頼関係を築くという、良いラポールの形成に重点をおいたことであった。そのため、彼らの登下校のやり方に不用意に口を出さないことや、仲間同士の関係に極力介入しないこと、子どもが親や学校へ知られたいくなくても行ってしまふ遊びなどについて（たとえば、ピンポンダッシュなど）は見ても見ぬふりをし、秘密の話などはその場で忘れるように、などということをして心がけた。

また、カメラやVTRについては、子どもたちに貸して遊ばせているうちに、落とされることで傷が付く場合がめずらしくないことが想定されたため、当初は、古い機材を準備するというものも行った。調査の初期において、案の定、機材は子どもたちによって落下させられるに至ったので、その際に、私は子どもたちに、「次は注意してね」という簡単な言葉だけをかけ、その後、調査に適した新しい機材を導入した。この場合、子どもたちは、細心の注意を払って機材を扱ってくれることとなり、調査もスムー

ズに実施されることとなった。また、機材を落としたときに、強い口調で注意をするのではなく、子どもたちのなかから自然と「注意しよう」という気持ちが自発的に導かれるように配慮したことで、彼らとの信頼関係を少し深めることに繋がっていったように思えた。

### 3-2 記録を行うなかでのかわり方について

調査では、子どもたちの下校に子どもたちの仲間としての立場で参加するという事に留意していた。そのため、私は、観察者という立場よりも子どもたちと行動を共にするメンバーの1人というような位置に自らを置いていた。子どもたちと同じように下校を行い、子どもたちと同じような行動をそこで行うこと、また、子どもたちとの多くの会話を通して、下校における体験を共有しながら道の環境との関わりの実践を行うことに主眼を置いていた。その際の記録のとり方としては、登下校の過程で起こるさまざまな出来事について、道の環境との関わり方や会話の様子、子どもたち同士の遊び、私と子どもたちの間に起こる出来事などに注目しながら、それらの場面をその日の下校の時間を追いつながらフィールドノートにまとめている。

子どもの領域に関わる場合の調査方法については、こうした参加観察法が1つの有用な方法となる。子どもの素の姿については、少ない時間で迫ることは難しく、彼らのグループのなかにメンバーの一員として入り込み、多くの時間を費やすなかでその実態が見えてくるものであると考えられるからである。10~12歳くらいの子供たちは、大人目から離れて彼らの独自の世界を築くようになる。この年代の子供たちに、調査者として接する場合には、同列的な関わりの上に子どもたちとの間に信頼性を築くことが大事なのである (Fine & Sandstrom, 1988)。

このようなことから調査では、子どもたちの

登下校の世界を、子どもたちの領域に調査者自らを位置することから捉えようとした。子どもたちと私との関わり方は、観察者とインフォーマントという関係ではなく、下校へ参加する“おじさん”と“子どもたちグループ”というような形に落ち着いている。私は、子どもたちと全くの同列関係ではないが、子どもたちの下校過程に参加する人であり、子どもたちにとっては下校の仲間というような位置に居ることが出来るように留意した。ただし、私は大人であり、その意味では子どもたちと完全な仲間になることは出来ない。例えば、下校の過程で崖などの自然環境に遊ぶ子どもたちに対し地域の人から注意が行われるといったような、子どもと地域の人との間に不都合が発生した場合にはその介入者になるし、あるいは、子どもたちへ注意をする立場になることもあった。また、私がいることで、校則などにより普段は自制している子どもたちの道草遊びに対する欲求が解放され、遊びが行われるということもあった。下校過程の初期においては、私に対し、子どもたちがわざわざ遊びを見せてくれるという意識的な行為も行われた。

こうしたことからわかるように、私の調査者としての立場からの子どもたちとの関わり方は、基本的には参加者という立場をとりながら、場合によっては子どもの行為に介入したり、子どもの行為を誘発したり、子どもと大人との相互作用への中間的介入が行われたりといったような揺れ動きがあった。また、時間的な経過にもなって、子どもが親にも学校にも秘密にしている話などといったことをしてくれるようになるといったことに見られるような、彼らとの精神的な結びつきが強くなっていったということもここに報告しておきたい。

### 3-3 子どもたちとのつきあい方

子どもを対象としたフィールドワークを実施

する場合、対象者である子どもたちとどのような関係性を築いていけばよいのかということに配慮することは非常に重要なことである。『子どもの参画』などの研究で、子ども集団のなかに直接入り込み、そこでの調査者と子どもたちとの関係性を構築することを通じることによる研究をリードしつづける“R. ハート”は、こうした参与観察の方法に着手し始めた自身の研究経歴の初期において、調査者の態度のあり方によって子ども集団のなかに不必要な波風をたててしまった自身の経験を取り上げ、子ども集団との健全で適切な関係性を保つことの難しさについて感想を述べている（Hart, 1979）。その後、ハートはフィールドワークの現場における作法に意識を向ける必要性について、さまざまな場において注意を喚起している。ハートが直面した問題は次のようなものであった。子ども集団とのつきあいを続けるなかで、ある時、一人の子どもの誕生日が近づいてくることを知るに至ったハートは、その子どもにプレゼントをあげることを思いついたのであるが、そのことが1つの事件を引き起こしてしまったのである。一人だけプレゼントをもらった子どもは、他の子どもたちから妬まれてしまい集団のなかで難しい立場に立たされてしまったという問題が発生したのだった。

子ども集団を対象とする研究フィールドにあつては、どの現場であれ、ハートが直面した問題と同じようなことがおこっても不思議ではないだろう。調査者が軽い親切心で、あるいは、子どもたちとずっと深い関係性を築きたいと考えた末の行動であっても、逆に、子ども集団のなかに築かれている独自の関係性にヒビを入れ、その結果として、調査者としても対象者と関わりにくい事態が発生してしまうことは少なくはないはずである。

もし、それぞれのフィールドでこうした事態が発生した場合、調査者が独自に問題解決にあ

たる場合がこれまでの一般的なやり方であろう。フィールドワークの技法や方法論の範疇においては、個々のフィールドそれぞれに発生する問題を一元的に解決することは難しいからである。しかし、ハートが体験したような失敗談が数多く集められ議論されることで、フィールドワークにおける方法ではなく、作法という人と人との関係性のなかでの態度のあり方という範疇のなかに問題を捉え直したとすれば、具体的解決策の視点が磨かれていく可能性があるようにも思えるのである。

他者との関係性の構築にあたっては、「ある場合にはこういう発言や行動はしないほうがいい」などといった暗黙の決まり事についての共通理解があることで、良好な関係性がそこに維持されている場合が少なくないのではなかろうか。そうした暗黙の了解事項は、文化的な背景を伴っている場合もあるだろう。その場合、画一的な性質を持たざるを得ない技法や方法論という性格を鑑みても、暗黙の決まり事という領域に技法という観点からかかわっていかうとした場合に困難が発生することは否めない。

やはり、暗黙の決まり事という領域については、その社会にある独自の文化的背景を踏襲した「作法」という概念を持ち出すことが必要だと思われるのである。特に子どもたちとのかかわりのなかでは、スピーディに移りゆく場面における適切な態度というものが必要となる。技術的な色合いが強い「方法」とは区別された、人間関係の間を捉えていくための概念として「作法」に期待されるころは大きいものと考えられる。

さまざまなフィールドに存在する作法が、出来るだけ数多く紹介されて、多様な領域のフィールドワーカーにそれぞれのフィールドにおける基本的作法についての理解を深めてもらうことが、個々のフィールドにおけるトラブルを事前に回避し、現場での円滑な研究の遂行にも

役だっていくものと考えられるのである。

### 3-4 缶ジュースの失敗

私が調査を行ったフィールドでの失敗体験を紹介することで、議論をさらに深めていきたい。

それは、ある夏の日の調査だった。子どもたちの下校時間は夕方4時頃であり、その日の暑さは絶頂を極めていた。あまりにも暑いため、私は、日頃の感謝の気持ちを込めて、その日一緒に帰っている子どもたち全員に缶ジュースをごちそうすることにした。

ジュースをごちそうするよと言ったときの子どもたちの反応はすさまじいものだった。歓声をあげはしゃぎまくり、自動販売機の前に群がっては「俺、これ!」「私はこれがいい!」などといって騒いでいた。全員に缶ジュースがいきわたって、通学路を元のように歩き始めたときのことである。

反対方向から自転車に乗った一人の男の子がやってきた。この男の子は別のクラスの子であり、我々のグループよりも早く家に帰り着いて、どこかに出かけるところであった。私たちが手にした缶ジュースを見たその男の子は、「どうしたと?それ?」といって、他の子たちに質問を浴びせていた。

子どもの一人が「おっちゃんにもらった」というと、すかさず、自分にも買って来てというおねだりが始まった。私は、一瞬躊躇したのち、それはだめだよという答えを返したのだった。なぜなら、その男の子とはそれまで一度も一緒に帰ったこともなく初めて見る顔であったことと、この男の子にもごちそうした場合、さらに他の子どもが来た時も同じように振る舞う必要が生じると考えたからである。通学路は、さまざまな子どもたちが使っているため、もしこの男の子にもごちそうをし始めた場合、収拾がつかない事態がおこることが予想されたからである。

私が丁寧に断っていると、その男の子はかなり機嫌が悪くなってきた様子で、ふくれ面をしてその場にいたのであるが、一瞬の後、いきなり私の頬にビンタをはってきただった。二発目がとんでこようとしたとき、私はとっさによけて、その子の手をつかみゆっくりと「だめだよ」というと、その男の子はパイとして自転車をこいで私たちのグループを離れていったのだった。

私は、ハートが経験した失敗を知っていたので、その場にいる全員の子どもにごちそうしたのであるが、まさか、後から他の子どもがやってきておねだりをする事までは考えが及ばなかった。これが、缶ジュースの失敗の全容である。

研究者がフィールドにおいてこのような事件に遭遇した場合、どのような態度をとることが望ましいのであろうか。いくらフィールドワークの技法に長けていても、この事例にあるようなことが、技法の知識の範囲内でうまく捌けるとは考えにくい。私がこの経験から得た教訓は、人目につくところで特定の子どもにプレゼントをすることは好ましいことではないということであった。フィールドワークの技法も重要であるが、その範囲では対処しきれないこうした事例については、フィールドでの作法の間違い集だとか、あるいは好ましい作法の例などといった形での事例の積み重ねを提示していくことも、フィールドワークを主とする研究分野全体の利益を考えると有用な知見となっていくのではなかろうか。

### 3-5 ピンポンダッシュは注意すべきか

別の事例を取り上げ、さらに議論を進めたい。通学路を子どもたちと一緒に歩いていると、彼らは実にさまざまないたずらを展開していることがわかる。学校や親が近寄らないようにという指示を出している場所に行くことはめずらし



くなく、他にも、寄り道やピンポンダッシュなどの行為を見せることが多々ある。私が調査者として一番心配したことは、子どもたちがピンポンダッシュをし続けながら家路に向かうときに、家のなかから住人が出てきて咎めることがないだろうかということについてだった。

私は、調査を行うなかで、子どもの素直な姿を全て捉えなかったということもあり、また、子ども文化に侵襲的にかかわることへの抵抗感を持っていたこともあって、彼らの行為を注意するという意図的に避けてきたつもりである。しかし、ピンポンをされる家の住人にとっては好ましからざる事態であることはいうまでもないことだろう。この場合も、注意をしたほうがよいのか、あるいは、私自身の判断に信念をもって行動することがよいのかということの選択について、どのような判断を下すべきことが望ましいことであるのかといったことを、フィールドワークの技法から導くことは難しい。

しかし、調査者はこうした事態においても、自分なりの適切な判断を下さねばならないのである。最終的にどのような判断が下されるかと言うことは、個々の調査者にまかせられることであろうが、判断を下す根拠について、論理を洗練させていく機会を持った上での決断がより望ましいのではないだろうか。ここにおいても、方法とは一線を画す作法という概念が必要とされていくのではなからうか。

### 3-6 フィールドを後にする時

フィールドワークを行う際に最も困難であり最も重要なことは、調査が終了してその現場から撤退することを決めたときに、関係者などにどのような振る舞いをするかということについてではなからうか。フィールドを撤退する際には、いつの時点でどのあたりの関係者くらいまでを対象に、どのような挨拶を行う必要がある

のかということについては、調査者にとっては非常に頭を悩ませる問題となっているのではないだろうか。

この見極めや礼儀作法を間違えると、当該フィールドでのフォロー研究を実施することが難しくなるばかりでなく、せっかく調査を行ったデータに関しても、その発表に待ったがかかる可能性もあるからである。そういう点からすると、最後の挨拶というものは、最初の挨拶にも増して重要度が高いものであるということがわかるのである。挨拶をする相手や、何をもって挨拶と代えるのかということの判断や、今後のかかわり方などについてのお願いの仕方といったことは、相手があるという関係性のなかでは「作法」として取り上げるべき項目であろう。

たとえば、私の研究フィールドは子どもを対象としていることもあって、当該関係者としては小学校の教諭や校長先生、地域の世話人とのつきあいが深いといえる。当然、研究の始めと終わりには丁寧な挨拶をするのであるが、それが、どのように重要になるのかといったことに最近遭遇した事例があるため以下に続ける。

子どもを取り巻く環境は、ここ数年で大きく変化し、安全という概念が最優先されるようになり子どもは学校や地域や親からの強い監視下に置かれるようになってきている。このような背景のなかで、私はフォロー調査をすることになったのだが、1つの小学校で難色を示されるということがあった。それは、当該小学校の校長が異動となっていたことと関係することであった。つまり、私の知らないうちに、その小学校とは関係性が薄れてしまっていたために、続きの調査を円滑に行うことが難しい状態となりそのフィールドに入った当初と同様の手続きが必要となってしまったのである。

他方、校長の異動が無かった小学校については、快く調査について許可を頂いたということが起こったのである。フォロー調査のスムーズ

な許可をしてくださった校長先生は、最近の子どもをめぐる監視強化の風潮には当然のことながら敏感になっていたのであるが、すでにこのフィールドで3年以上の研究を行ってきた私に対しては、好意的に研究の実施と意義について認めてくださったのである。フィールドワークの実施に際しては、相手との関係性がきちんとしたラポールの構築やその継続による“パイプ”という形が実現されていなければ成り立たないことが端的に示される事例といえないだろうか。

さらに、子どもを対象としたフィールドの場合について、相手との関係性という点に注目した場合、上記のような間接的な関係とでもいうべき構造と調査者が直接的・集中的に触れあうインフォーマントとの直接的関係という構造があることが指摘できよう。研究を成立させるためには、これら両方の関係性をうまく構築していくことが必要である。

フィールドを後にする場合に、現在、私が最も重要だと考えている作法の1つとしては、調査者が直接的関係性を強く築いた相手との別れをどのようにきりだし説明するかということについてのことである。それは、たとえば、子どもが相手の場合には、「調査はこれで終わりなので明日から来なくなるからね」というだけの説明をすれば事足りるのかということについての疑問がぬぐえないからである。

調査者は、あるとき突然、子どもたちの前に姿を現し、時間を経て仲良くなるという過程を経た後、あるとき突然、子どもたちの前から姿を消すことになるのである。私が、調査の終了を告げたときも、子どもたちはとても残念がって、明日も明後日もずっと来て欲しいというような思いを私にぶつけてきたのである。相手がいることで成り立っているフィールドワークというものは、相手との関係性を築いていこうとする初期の段階よりも、相手との関係性に一旦

終止符を打たなければならない段階が最も難しく、また相手に対する真摯な態度のあり方が問われるのではないだろうか。

自らの研究を行うために、ある時、フィールドに顔を見せ、そこで関係者と仲良くなり、そして調査が終了すると去っていくという研究者の姿は、フィールドにおける作法のあり方を間違えると、特に子どもの目からすれば、身勝手な人間というような感情を持たれる可能性があるだけでなく、彼らの心を傷つけかねない危うさを内包しているということを、私たちは自覚しておかねばならないのではないだろうか。別れ際の作法についても、今後は、議論が積み重ねられることが必要となるだろう。

#### 4 フィールド撤退後の関係性について

##### 4-1 朝日新聞の取材

フィールドワークは、フィールドから撤退したらそれで終わりというわけではない。フィールドを後にしてからも、研究発表をどこかで行う時などには、現場関係者への再度の連絡や許可といったものを取らなければならないことも多く、また、実施された研究自体が社会からの注目を集めるといったことや、メディアによる世間への露出ということが起こってくる場合も少なくない。

フィールドワークは、その研究を実施している研究者だけのものではなく、該当するフィールドにいる関係者すべてがかかわることで成立しているという性格を有しているとも考えられるため、この点で、研究者だけの判断によって研究が取り扱われるわけにはいかない場合というものが発生することが少なくない。研究を始める際も、研究遂行中にも、研究後にも、すべての期間において現場関係者との良好な関係性が築かれていなければ、そこでの研究は日の目を見る機会に恵まれないといった状況に陥るこ

とも否定できない。

私の研究フィールドにも、調査が終了してからしばらくたって、朝日新聞からの取材の申し入れがあるということが発生した。折しも、子どもが事件に巻き込まれる報道を頻繁に目にするという時期と重なっていたため、取材の実施については難しいだろうと予想された。取材の趣旨は、子どもの安全が叫ばれるなかで管理体制が強まっていくということが進んでいる状況下において、実際に子どもたちはどのような気持ちを抱いているのかといったことや、規制下においてどのような活動を行っているのかといったこと知りたいということであった。たまたま私が、その趣旨とピッタリ添う研究を行っていたので取材の申し入れを行ったということであった。

こうした場合、研究を行ったのは私であるから、私が判断すればよいというわけにはいかないことは言うまでもないことだろう。現場関係者の、特にこの場合は学校長の判断が必要となってくる。その場合、校長と良い関係を築いているか、また、信頼を得ることが出来ているかといったことが、取材許可の判断に影響することが考えられないだろうか。さらに、その校長自身が、子どもを取り巻く環境についてどのような考えを持っているかということも関係してくるものと思われる。

私は、良好な関係を築いていた小学校のなかから、さらに、学校長の日頃の発言などから性格や価値観といったものを推測するなかで、概ねご理解くださるのではなかろうかと思われた。1つの学校をピックアップして、“取材申し込みがきている”旨の連絡を行い、校長の判断を仰いだ。その結果、取材に理解を示してくださり許可をいただけることとなったのである。

学校側に対して、研究の始まりから終わりまで終始丁寧に説明を行うことを通して、きちんと

とした信頼関係を築いていたことと、学校長との話し合いの機会を数多く頂いていたおかげで、校長の人柄についてある程度の理解が得られていたことなどから、“研究を社会に発表するという機会にも繋がった”事例の1つではなかろうか。子どもを対象としたフィールドでは、調査開始時のみならず、調査終了後も引き続きゲートキーパーが大きな存在となるのである。

#### 4-2 研究のフィードバックについて

一連の調査と発表を終えたあとに、私は調査結果から社会に向かって発言しなければならぬことを、書籍という形態によって発表することにした。ただし、実際に調査を行ってからの時間が数年経っていたこともあり、追加調査および調査実施許可を再度必要とすることとなった。学校側との相談は、「地域や学校名を露出してもよいか」ということや、子どもたちの顔が映った写真の取り扱いについてなど、さまざまな項目についての検討が加えられた。

すべてにおいて合意が形成された後、社会に対する成果物として本フィールドにおける調査が発表されるに至った。書籍として刊行されたものについては、私はすぐに関係者に報告に伺った。取り上げた全ての学校とその関係者に報告を行うと、先方は大変喜んで歓迎してくれた。こうした挨拶まわりを通すことによって、今後についても関係性の持続と調査協力の依頼を取り付けることが可能となっている。

このことは、フィールドワークを主とする研究分野においては、研究が成果物としてまとめられた場合、すみやかに現場へのフィードバックを行うことで、その後の関係性の持続ということを更に発展させることを可能とするエピソードではないだろうか。子どもを対象としたフィールドでは、調査の期間が長期にわたり数年といった時間が経過していくことで、対象としていた子どもたちが成長してしまい、同一の子

どもたちを対象としながらの調査が難しくなるという可能性も高い。こうした事情もあって、フィールドにおける公的なゲートキーパーとの太く長いパイプを築いておくことは、非常に大事なことであると考えられるのである。

## 5 まとめ

本稿では、フィールドワークを主体とする研究領域でこれまで議論されてきた「技法」や「方法」といった視点に「作法」という概念を加えることによって、フィールドワークの実施に直接的・間接的に関係する環境を適切に整えていくことを可能とする視座について、特に子どもを対象としたフィールドを取り上げることで、調査者とインフォーマントとの関係性のなかでの態度のあり方といった視点について広がりを持たせるための議論を行ってきた。

子どもを対象としたフィールドにおける調査者とインフォーマントとの関係のなかで、特に問題となったことを、本事例での経験から整理すると以下の5つの点に集約される。1つには、相手が子どもであるということから、調査時における機材の取り扱いなどについて、機材の破損といったことがおこる場合が予測されるが、対処の仕方が難しいということがあった。2つ目としては、子どもが行うことに対して、大人の価値観を持って注意をするという介入についての判断の難しさを指摘したい。3つ目には、調査者が子どもとの関係性を深めたいという意識からとった行動が、子ども同士の関係に亀裂を生じさせることがある場合があったことを取り上げておく。4つ目には、そのことと関係して、インフォーマントとなった子どもの集団への深いかかわりが、インフォーマントではない他の子どもの感情に傷を与える可能性があることを思い出したい。5つ目には、子どもたちとの別れ際の問題があった。調査者が子どもとの

間においてという構図だけでなく、子どもの立場としては、調査者との間において良いラポールを築いていたはずという子どもから見た構図のなかで、自らの目の前からある時、仲良くなった相手が消えていくということは、彼らにとって辛い体験であることは否定できないだろう。

本事例からは、以上のような問題点が導かれたのであるが、これらへの対処については、フィールドワーカーとインフォーマントとの間における同列的なかわりのなかでの臨機応変的なやりとりに頼らざるを得ないことは前述したとおりである。つまり、ある問題に対してある1つの解決を目論むという方法という視点からでは対処が難しいこうした場面については、相手との関係性のなかでの態度というものを取り扱う領域における作法という概念を用いることが大事になってくるものと考えられる。

さらに、フィールドワークの実施にあたっては、個々のフィールドにおいてその地域や社会、場所に特有のさまざまな問題が生じる可能性がある。こうした場合にも、フィールドに固有の世界といかにかかわるかという態度については、方法といった枠内ではなく作法の領域に所属してくる問題となると考えられる。それは、それぞれの世界には固有の文化的背景が存在しているからである。

フィールドワークとは、固有の文化を持つ独自の社会を形成する環境のなかに、身を投じていくことで実施されるという性格の側面があることは否定できない。自分の所属する世界とは違う世界とのかかわりを持つとする場合には、その世界のなかに構築されている“法”に従うことが作法として求められるのではなかろうか。『暴走族のエスノグラフィー』で佐藤郁哉が明らかにした世界は、いわゆる一般人が所属する世界とは全く異なる世界に光をあてたものであるが、フィールドワークを行っている間

の彼は、自らが所属する一般的な社会の価値観をもってその社会に介入するという愚挙に出ることは一度もなく、あくまでも調査の対象とした社会のなかに身を置かせてもらっていただけであった。フィールドワーカーとしての彼は、暴走族社会を形成している法界に従ったということなのだろう。そうでなくては、対象とする社会のなかに入り込み、その世界を浮き彫りにしていくことは出来なかったのではないだろうか。つまり、フィールドワークの作法としては、研究対象とする社会が独自に持っている“法”に従うということが1つの重要な態度となってくると考えられるのである。

それは、子どもを対象としたフィールドワークを行っている私自身についても、子ども世界のなかに構築されている法に従うことが望ましいのだという示唆が与えられているようにも思える。子どもの世界のなかに、大人社会の常識や判断を安易に持ち込むことは、他者の世界に土足で介入するというような不作法なことなのではないだろうか。なぜなら、他の世界の住人である研究者が介入的の行為を行った場合、そのフィールドの住人にとって、自分たちの世界に勝手に入ってきた人間がお節介までやいてくるように映るだけのこともかもしれないからである。その場合、フィールドワークを行う研究者は、自らの研究のために他の世界を引っかき回しているだけの存在になってしまうのではなかろうか。

作法という概念が必要な理由はこの点にかかわってくるのである。つまり、研究者がフィールドにおいてどのような作法に従わなければならないかということを考えることは、その研究は誰のために何のために実施されようとしているのかということについての逆説的な問いとなっているからである。フィールドワークは研究のために安易に実施されるのではなく、その調査が実施されると、どんな利益がどこに還元され

るのかといった視点を忘れてはならないだろう。作法を意識するなかでこのことが問われていくのだとすれば、フィールドワークの方法論とは異なる、研究の社会性という立場からの概念としてこの視点について検討を加えていく価値があるものと考えられる。

## 引用文献

- 木下勇（1996）遊びと街のエコロジー，丸善  
 桜井厚，好井裕明（編）（2000）フィールドワークの経験，せりか書房  
 佐藤郁哉（2002）フィールドワークの技法，新曜社  
 佐藤郁哉（1984）暴走族のエスノグラフィー，新曜社  
 柴山真琴（2006）子どもエスノグラフィー入門，新曜社  
 仙田満（1992）子どもとあそび，岩波書店  
 Fine, G.A. & Sandstrom, K.L. (1988) *Knowing Children: Participant Observation with Minors*, London: Sage Publication  
 Hart, R. (1979) *Children's Experience of Place*. New York: Irvington Publishers, distributed by Halsted Press.  
 Hart, R. (1997) *Children's Participation: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care.*, London: Earthscan.  
 Schatzman, L. & Strauss, A.L. 川合隆男（監訳）（1999）フィールド・リサーチ。現地調査の方法と調査者の戦略，慶応義塾大学出版会  
 中村尚司，広岡博之（編）（2000）フィールドワークの新技法，日本評論社  
 水月昭道，南博文（2003）下校路に見られる子どもの道草遊びと道環境との関係，日本建築会論文報告集，574，61-68  
 水月昭道，南博文（2003）子どもの遊び環境研究の動向と展望，都市・建築学研究，4，25-36  
 水月昭道（2004）子どもの「遊びの場」の構造に関する研究～通学路における道草遊びと道環境とのかわりから～，九州大学学位論文  
 水月昭道（2006）子どもの道くさ，東信堂  
 水月昭道（2007）通学路での子どもの道くさ遊び，発達109，20-28，ミネルブア書房  
 Mizuki, S. & Minami, H. (印刷中) *Some Thoughts Concerning*

Environmental Planning from the Standpoint of Children~From a look at children's 'michikusa asobi' along two different streets~, CYE, Children, Youth and Environments

箕浦康子 (1999) フィールドワークの技法と実際, ミネルブア書房

好井裕明, 山田富秋 (編) (2002) 実践のフィールドワーク, せりか書房

好井裕明, 三浦耕吉郎 (編) (2004) 社会学的フィールドワーク, 世界思想社

無藤隆, 倉持清美 (編) (2003) 保育実践のフィールド心理学, 北大路書房

やまだ ようこ, 南 博文, サトウ タツヤ (2001) カタログ現場 (フィールド) 心理学—表現の冒険, 金子書房

子書房

Robert Emerson, Linda Shaw, Rachel Fretz, 佐藤郁哉, 山田 富秋, 好井 裕明 (翻訳) (1998) 方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで, 新曜社

Werner, C.M., & Altman, I. (1998) A dialectical/transactional frameworks of social relations: Children in secondary territories. In D. Gerlitz, H. j. Harloff, & J.Valsiner (Eds.), Children, cities, and psychological theories: Developing relationships. Berlin: Walter de Gruyter.

(2006. 10. 31 受稿) (2007. 2. 14 受理)